

Alexandroff-Urysohn-コンパクトと選択公理

alg-d

<http://alg-d.com/math/ac/>

2016年12月29日

定義. 集合族 \mathcal{A} に対し $\bigcap \mathcal{A} := \bigcap_{A \in \mathcal{A}} A$, $\bigcup \mathcal{A} := \bigcup_{A \in \mathcal{A}} A$ と書く.

定義. X を位相空間とする.

1. $x \in X$ が $A \subset X$ の完全集積点 (complete accumulation point)
 $\iff x$ の任意の開近傍 U に対し $|A| = |A \cap U|$ となる.
2. X が Alexandroff-Urysohn-コンパクト
 $\iff X$ の無限部分集合は完全集積点を持つ.
3. X が Tychonoff-コンパクト $\iff X$ が閉区間 $[0, 1]$ の直積空間の閉部分空間と同相

定理 1. 以下の命題は (ZF 上) 同値.

1. 選択公理
2. コンパクト \implies Alexandroff-Urysohn-コンパクト.
3. コンパクト \iff Alexandroff-Urysohn-コンパクト.
4. Alexandroff-Urysohn-コンパクト空間の有限和は Alexandroff-Urysohn-コンパクト.
5. 開集合が有限個の位相空間は Alexandroff-Urysohn-コンパクト.
6. 密着位相空間の有限和は Alexandroff-Urysohn-コンパクト.

証明. (1 \implies 2) (X, \mathcal{O}) をコンパクトとし無限部分集合 $A \subset X$ を取る. A は完全集積点を持たないと仮定する. すると任意の $x \in X$ に対しある開近傍 $U \subset X$ が存在して $|A| > |A \cap U|$ となる. よって開集合の族 $\mathcal{U} := \{U \in \mathcal{O} \mid |A| > |A \cap U|\}$ は開被覆である. X はコンパクトだからある $U_1, \dots, U_n \in \mathcal{U}$ が存在して $X = U_1 \cup \dots \cup U_n$ と書ける. 故に $A = (A \cap U_1) \cup \dots \cup (A \cap U_n)$ となる. よって選択公理により $|A \cap U_1| + \dots + |A \cap U_n| <$

$|A| + \dots + |A| = |A|$ であるから $|A| \leq |A \cap U_1| + \dots + |A \cap U_n| < |A|$ となり矛盾 .

※ 選択公理 \iff 「 $|A_1| < |A_2|, |B_1| < |B_2| \implies |A_1| + |B_1| < |A_2| + |B_2|$ 」である .
 また $|A| + |A| = |A|$ の証明も選択公理を使う .

(2 \implies 5) 開集合が有限個しかない空間はコンパクトだから明らか .

(5 \implies 6) 密着位相空間の有限和は開集合が有限個なので明らか .

(6 \implies 1) 濃度の比較可能性を示す . A と B を互いに素な無限集合とする . A と B に密着位相をいれ , $X := A \cup B$ とする . 仮定 6 より X は Alexandroff-Urysohn-コンパクトとなる . よって X は完全集積点 $x \in X$ を持つ . $x \in A$ としても一般性を失わない . このとき A は x の開近傍だから $|X| = |X \cap A| = |A|$. 故に $|B| \leq |X| = |A|$ となり , $|A|$ と $|B|$ は比較可能である .

(1 \implies 3) 既に (1 \implies 2) で示したように「コンパクト \implies Alexandroff-Urysohn-コンパクト」である . よって「Alexandroff-Urysohn-コンパクト \implies コンパクト」を示せばよい .

X を Alexandroff-Urysohn-コンパクトとする . 閉集合からなる族 \mathcal{A} が有限交差し性を持つとする . $\bigcap \mathcal{A} \neq \emptyset$ を示せばよい . 基数 $\kappa := |\mathcal{A}|$ に関する超限帰納法で示す . (選択公理により , \mathcal{A} が整列可能なことに注意する .)

まず , κ が有限基数のときは明らかである . なので κ は無限基数であるとする . 次の条件を満たす $\mathcal{B} \subset \mathcal{F}$ が存在する .

- (a) \mathcal{B} は有限交差し性を持つ .
- (b) (\mathcal{B}, \supset) は整列順序集合である .
- (c) $\bigcap \mathcal{B} = \bigcap \mathcal{A}$

$\therefore \varphi : \kappa \rightarrow \mathcal{A}$ を全単射とする . $\alpha < \kappa$ に対し , 閉集合の族 $\{\varphi(\beta) \mid \beta < \alpha\} \subset \mathcal{A}$ は有限交差し性を持つ . $|\{\varphi(\beta) \mid \beta < \alpha\}| = |\alpha| < \kappa$ だから帰納法の仮定より $F_\alpha := \bigcap_{\beta < \alpha} \varphi(\beta)$ は空でない . そこで $\mathcal{B} := \{F_\alpha \mid \alpha < \kappa\}$ と置く . 明らかに (a) と (c) が成立する . $F \in \mathcal{B}$ に対し $f(F) := \min\{\alpha < \kappa \mid F_\alpha = F\}$ として $f : \mathcal{B} \rightarrow \kappa$ を定める . f は明らかに単射 . U_α の定義より $\alpha_1 < \alpha_2 < \kappa$ に対し $F_{\alpha_1} \supset F_{\alpha_2}$ である . よって $f : (\mathcal{B}, \supset) \rightarrow (\kappa, \leq)$ は順序を保つことが分かる . そこで f により \mathcal{B} を κ の部分順序集合とみなせば , (\mathcal{B}, \supset) の整列性が分かる .

このとき $\bigcap \mathcal{B} \neq \emptyset$ を示せばよい . $|\mathcal{B}| < \kappa$ のときは帰納法の仮定より成立するので , $|\mathcal{B}| = \kappa$ とする .

(\mathcal{B}, \supseteq) が整列順序だから, $F \in \mathcal{B}$ に対し $\tilde{F} := \{G \in \mathcal{B} \mid F \supseteq G\} \subset \mathcal{B}$ は最小元 (即ち \subset についての最大元) を持つ. それを $S(F)$ と置く. 明らかに $F \supseteq S(F)$ である. そこで集合族 $\{F \setminus S(F)\}_{F \in \mathcal{B}}$ に選択公理を適用して選択関数 $g: \mathcal{B} \rightarrow \bigcup (F \setminus S(F)) \subset X$ を得る. $Y := g(\mathcal{B})$ と置く. $|Y| = |\mathcal{B}| = \kappa$ は無限基数だから, Y は完全集積点 $x \in X$ を持つ. 任意の $F \in \mathcal{B}$ に対し $x \in \bar{F}$ である.

$\therefore x$ の開近傍 $U \subset X$ に対し $|g^{-1}(Y \cap U)| = |Y \cap U| = |Y| = \kappa$ だから, $g^{-1}(Y \cap U) \subset \mathcal{B}$ は非有界部分集合である. 故に $F \supseteq G$ となる $G \in g^{-1}(Y \cap U)$ が存在する. このとき $g(G) \in Y \cap U \subset U$ だから $g(G) \in U \cap (G \setminus S(G)) \subset U \cap F$, 従って $U \cap F \neq \emptyset$ となる.

F は閉集合だから $\bar{F} = F$, よって $x \in \bigcap_{F \in \mathcal{B}} \bar{F} = \bigcap \mathcal{B}$ である.

(3 \implies 4) 仮定 3 と「コンパクト空間の有限和がコンパクト」であることから明らか.

(4 \implies 6) 密着位相空間は Alexandroff-Urysohn-コンパクトなので明らか. □

定理 2. 以下の命題は (ZF 上) 同値.

1. 選択公理
2. Alexandroff-Urysohn-コンパクト空間の直積は Alexandroff-Urysohn-コンパクト.
3. Alexandroff-Urysohn-コンパクト空間の有限直積は Alexandroff-Urysohn-コンパクト.
4. 開集合が有限個な空間の直積は Alexandroff-Urysohn-コンパクト.
5. 有限離散位相の直積は Alexandroff-Urysohn-コンパクト.
6. 離散位相空間 $\mathbf{2} := \{0, 1\}$ の直積は Alexandroff-Urysohn-コンパクト.

証明. (1 \implies 2) 定理 1 の条件 3 (コンパクト \iff Alexandroff-Urysohn-コンパクト) と Tychonoff の定理により明らか.

(2 \implies 3) 明らか.

(3 \implies 1) 濃度の比較可能性を示す. その為に A と B を任意の無限集合とし, $X := A \cup B$ に密着位相を入れる. X と $\mathbf{2}$ は共に Alexandroff-Urysohn-コンパクトだから, 仮定 3 により $X \times \mathbf{2}$ も Alexandroff-Urysohn-コンパクトとなる. よって部分集合 $C := (A \times \{0\}) \cup (B \times \{1\}) \subset X \times \mathbf{2}$ は完全集積点 (x, y) を持つ. $y = 0$ としても一般性を失わない. すると $X \times \{0\}$ は $(x, 0)$ の開近傍だから $|C| = |C \cap (X \times \{0\})|$ となる. 従って $|A| = |A \times \{0\}| = |C \cap (X \times \{0\})| = |C| = |A \cup B| \geq |B|$.

(1 \implies 4) 定理 1 の条件 5 より, 開集合が有限個の空間は Alexandroff-Urysohn-コン

コンパクトである．よって既に同値性が示された条件 2 により 4 が分かる．

4 \implies 5 と 5 \implies 6 は明らか．

(6 \implies 1) 濃度の比較可能性を示す．その為に A と B を任意の無限集合とし, A にも B にも含まれない元 $\infty \notin A \cup B$ を用意する． $X := A \cup B \cup \{\infty\}$ と置き, 直積 2^X を考える．仮定 6 より 2^X は Alexandroff-Urysohn-コンパクトである．部分集合 $Y \subset X$ の特性関数を $\chi_Y \in 2^X$ と表す．即ち

$$\chi_Y(x) = \begin{cases} 0 & (x \notin Y \text{ のとき}) \\ 1 & (x \in Y \text{ のとき}) \end{cases}$$

である． $\tilde{A} := \{\chi_{\{a\}} \mid a \in A\}$, $\tilde{B} := \{\chi_{\{a, \infty\}} \mid a \in B\}$ と書く． $\tilde{A} \cup \tilde{B} \subset 2^X$ は無限集合であるから, 完全集積点 $f \in 2^X$ を持つ．

(i) $f(\infty) = 0$ のとき

$U := \{g \in 2^X \mid g(\infty) = 0\} \subset 2^X$ は f の開近傍だから $|\tilde{A} \cup \tilde{B}| = |(\tilde{A} \cup \tilde{B}) \cap U|$ が成り立つ．故に $|B| = |\tilde{B}| \leq |\tilde{A} \cup \tilde{B}| = |(\tilde{A} \cup \tilde{B}) \cap U| = |\tilde{A}| = |A|$.

(ii) $f(\infty) = 1$ のとき

$U := \{g \in 2^X \mid g(\infty) = 1\} \subset 2^X$ は f の開近傍だから $|\tilde{A} \cup \tilde{B}| = |(\tilde{A} \cup \tilde{B}) \cap U|$ が成り立つ．故に $|A| = |\tilde{A}| \leq |\tilde{A} \cup \tilde{B}| = |(\tilde{A} \cup \tilde{B}) \cap U| = |\tilde{B}| = |B|$.

(i)(ii) より $|A|$ と $|B|$ は比較可能である． □

定理 3. 以下の命題は (ZF 上) 同値．

1. 選択公理
2. Tychonoff-コンパクト空間は Alexandroff-Urysohn-コンパクト．
3. $[0, 1]$ の直積は Alexandroff-Urysohn-コンパクト．

証明. (1 \implies 2) X を Tychonoff-コンパクト空間とする． X は $[0, 1]^A$ の閉部分空間とみなしてよい．Tychonoff の定理により $[0, 1]^A$ はコンパクトとなる．よってコンパクト空間の閉部分空間である X もコンパクトである．定理 1 の条件 2 (コンパクトならば Alexandroff-Urysohn-コンパクト) により X は Alexandroff-Urysohn-コンパクトである．

(2 \implies 3) $[0, 1]^A$ は Tychonoff-コンパクトだから明らか．

(3 \implies 1) 濃度の比較可能性を示す．その為に A と B を任意の無限集合とし, A にも B にも含まれない元 $\infty \notin A \cup B$ を用意する． $X := A \cup B \cup \{\infty\}$ と置き, 直積 $[0, 1]^X$ を考える．仮定 3 より $[0, 1]^X$ は Alexandroff-Urysohn-コンパクトである．部分集合 $Y \subset X$

の特性関数を $\chi_Y \in [0, 1]^X$ と表す . 即ち

$$\chi_Y(x) = \begin{cases} 0 & (x \notin Y \text{ のとき}) \\ 1 & (x \in Y \text{ のとき}) \end{cases}$$

である . $\tilde{A} := \{\chi_{\{a\}} \mid a \in A\}$, $\tilde{B} := \{\chi_{\{a, \infty\}} \mid a \in B\}$ と書く . $\tilde{A} \cup \tilde{B} \subset [0, 1]^X$ は無限集合であるから , 完全集積点 $f \in [0, 1]^X$ を持つ .

(i) $f(\infty) \leq \frac{1}{2}$ のとき

$U := \{g \in [0, 1]^X \mid 0 \leq g(\infty) < \frac{2}{3}\} \subset [0, 1]^X$ は f の開近傍だから $|\tilde{A} \cup \tilde{B}| = |(\tilde{A} \cup \tilde{B}) \cap U|$ が成り立つ . 故に $|B| = |\tilde{B}| \leq |\tilde{A} \cup \tilde{B}| = |(\tilde{A} \cup \tilde{B}) \cap U| = |\tilde{A}| = |A|$.

(ii) $f(\infty) > \frac{1}{2}$ のとき

$U := \{g \in [0, 1]^X \mid \frac{1}{2} < g(\infty) \leq 1\} \subset [0, 1]^X$ は f の開近傍だから $|\tilde{A} \cup \tilde{B}| = |(\tilde{A} \cup \tilde{B}) \cap U|$ が成り立つ . 故に $|A| = |\tilde{A}| \leq |\tilde{A} \cup \tilde{B}| = |(\tilde{A} \cup \tilde{B}) \cap U| = |\tilde{B}| = |B|$.

(i)(ii) より $|A|$ と $|B|$ は比較可能である . □

参考文献

- [1] Horst Herrlich, Axiom of Choice , Springer, 2006
- [2] ケネス・キューネン , 『集合論-独立性証明への案内』 , 藤田博司訳, 日本評論社, 2008